

## 【愛情とぬくもり・・・】

### 言葉の持つ力

「現代人の人間形成は食卓から始まる」、私はそう思います。現代日本の家庭では、ご飯ができれば家族が黙って席につき、黙って食べて、食べ終わると、各々の部屋へ黙って立ち去っていく。これが普通の家族らしい。何が欠けているのかさえも分らない。何が欠けているのかさえも分らない。現代。皆さんの家庭はどうですか? 「頂きます・おいしいね・ごちそうさま」という人間らしい言葉をかけ合っていますか? 特に父親である男性が率先して「おいしいね」と言葉に出して言えるようになるれば、状況は大きく変ると思う。

本来人間は20ヶ月間、母親の胎内にいなければならぬ。しかし、かし半分の10ヶ月間で出てくる。頭が大きくなりすぎると出産ができなくなるからだ。20ヶ月かかるところを半分の10ヶ月間で生まれてきたからには、もう10ヶ月間はお腹の中にいるように、母親がお乳を与えなければ生きていけない。赤ちゃんの脳はどんどん細胞が増え、生まれた時の時は約360億だったのが、3歳になる頃には約1360億にもなる。脳細胞からはニューロンという繊維が出ていて、そのニュー

ロン繊維はいくつになっても伸び続ける事がわかった。つまり脳細胞が増え続けることが証明されたのである。しかしそれには色々な刺激が必要なのだ。特に人間の場合は「言葉」、つまり「語りかけ」が大切なのだ。数ヶ月前にも、ある逸話をご紹介した通り、言葉の持つ力、赤ちゃんに言葉を投げかけてあげなければ、死んでしまうのである。その時に皆様から寄せられた多くの反響に答え、今回はまた別の話をご紹介します。

かつてドイツのバルロッサは北イタリアを占領した。その際たくさんの戦争孤児が生まれ、敬虔なカトリック教徒だったバルロッサは「赤ん坊は天使」と思い、清潔な施設に入れて育てた。そこではミルクを充分に与え、いつも綺麗なシーツとオムツに包んで完璧な保育をした。ところがバルロッサは「フランス語は女子を誘惑する言葉であり、ドイツ語は軍人の言葉であり、イタリア語はなまっている。そんな言葉で天使に話しかけてはならぬ」と言って、保育中は赤ちゃん達に一切言葉をかけてはならないと、看護師達に厳命した。言葉をかけられない赤ちゃん達は、自ら言葉を発する事ができなかつたばかりか、やがて衰弱し、ついには全員死んでしまったのである。

また第一次世界大戦後も、ドイツやフランスは戦争孤児で溢れていた。当時の国際連盟は孤児達を病院に集め、

栄養価の高いミルクを与え、清潔な環境で完璧な保育をした。しかし人手が足りなかつたため子供達にろくに言葉もかけてやれなかつた。すると、およそ四歳で全員が死んでしまったと伝えられている。

第2次世界大戦後も同様の状況が起こつたが、やはりどんなに完璧な施設で完璧な保育を施しても、語りかけがなかつた為に、子供達は死んでしまった。つまり言葉をかける、かけないという事は、生死にかかわるほど重要な事なのである。もちろん生まれつき耳が不自由な子供もいるでしょう。しかし「話しかけられている」事は目で確認できる。中にはヘレン・ケラーの様に目も耳も不自由な子供がいるが、本能的に愛情に包まれて肌で言葉を感じる事はできる。どんなに完璧な環境を与えても、人間の言葉、ぬくもりを感じなければ子供は育たないのである。それはこれほどまでに医療技術が進歩した現代でも同じ事が言える。

世界的にみて、現在日本は出生率が大変低く、未熟児は大切に保育器の中に入れて育てられる。保育器の中は一定の温度に保たれた無菌状態で、酸素も充分に送り込まれている。未熟児を育てる為に完璧な環境といってもよい。ところが保育器の中に入れられたままの未熟児は、次々と胃潰瘍(いかいよう)になつてしまった。大人も仕事のストレスなどから胃潰瘍になつたりす

るが、赤ちゃんは生まれてすぐに保育器に入れられ、これまでずっと聞いていた母親の心音が聞こえず、どうしようもなく不安になる。もちろん生まれたばかりの小さな赤ちゃんの脳がそこまで働いているはずもない。本能的に孤独に絶えかねて胃潰瘍になる。現在、未熟児の胃潰瘍の治療、およびその予防として行われているのは「カンガル式療法」です。これは、朝と夕方のみ10分間でもいい。保育器から管を付けたまま赤ちゃんを取り出し、裸の母親のお腹の上に寝かせ、心音を聞かせてあげるのである。赤ちゃんは母親と触れ合い、母親の心音を聞き、母親の語りかけを聞いて、心から安心をする。それだけで胃潰瘍なんて治つてしまふのである。薬でもなく、治療でもない、人のぬくもりと語りかけで子供の病気が治つてしまうのである。

歴史が物語る今回の話から、子供を養育していくヒントと、人間として生かされている事を再確認する事ができるでしょう。

副住職 谷川寛敬

合掌